Actinia (12)：167－179 (1999)

イリヤンジャヤ高地の生態考察

佐々木　寧[1)]

Ecological Review for the Iriyanjava Highland

Yasushi SASAKI [1)]

はじめに～熱帯林の中に隔絶した世界

ジャワ島の古い都ジョクジャカルタから飛び，インドネシア第２の大都市スラバヤに一泊，次の日の早朝スラベシ島のウジュンパンダへ飛んだ。さらに乗り継いでニューギニア島イリヤンジャヤの首都ジャヤプラへ向かう。延べ十数時間に及ぶ空の旅である。一路東への移動の為，乗り継ぐ度に時差に合わせて時計を修正せねばならない。そのうち訳が分からなくなってくる。

ニューギニア島上空にさしかかってから１時間以上，飛行機の下は熱帯林の森が延々と続く。ダークグリーン一色のみで，機上からの写真も撮りようがない。変化のない大海原を撮るようなものである。恐らくアマゾンと並ぶ世界で最後に残された熱帯林地帯であろう。

ジャヤプラで一泊した後，小型プロペラ機に乗り換え，いよいよイリヤンジャヤ高地ワメナに飛ぶ。約１時間程のフライトだが下界は再び森，森，森が続く。人の住む気配は全くない。やっとのこと景観を変化させる川が見えてきた。川はみごとなまでに蛇行していた（図１－１）。小型飛行機は，ついに石灰岩の白く切り立った山間をぬって飛び，急に広い高原地帯にでた。中心都市のワメナは，周囲を3,000m級の山々に囲まれた広い盆地の中にある。広大な高原状で一面樹木の少ない草原地帯となっている。しかし，良く見ると小さな集落とモザイク様の畑が広がっていた。長く念願していた“究極の石器時代人の世界”，ダニ族（DANI）の住む世界へ飛んできたのである。ここからは最短距離でも約200km，熱帯林の中をくぐらねば海岸へ達することはない。

現在なお，外界に通じる道は一本もない。それも単に熱帯雨林だけではなく，険しい山地と，広大な湿地や湿地林もある。とても歩いては到達できない世界である。もし飛行機が不時着でもしたら，たとえ食料が十分にあったとしても，何カ月も出てこれないだろう。

1）　埼玉大学工学部建設工学科都市環境工学研究室
（Laboratory of Urban Environmental Engineering, Department of Civil & Environmental Engineering, Faculty of Engineering, Saitama University, Urawa 338, Japan)

ダニ族の衣

飛行場を一歩出るともうコテカ（ペニスサック）ひとつだけのダニ族の人々が闊歩する世界である。女性は植物繊維で作った腰蓑一つ，頭からはやはり植物の繊維で編んだ背負い袋を下げている。背負い袋は，様々な種類の植物繊維を使うことにより，多様な色の組み合わせが可能である。荷物を運び，雨の時はマント代わり，寒い時はオーバー代わりとなる。ここは赤道直下だが，標高2,000m弱あり，夏も冬も，雨期も乾期もない常春の国である。暖をとる必要性もなく，衣類は発展しなかったのである。男子はコテカのみ，時にコテカの先端に羽根飾りと小さな袋を持ち，この中に貴重品を入れて持ち歩く。貴重品とは山仕事の合間に吸うタバコのきざみと，それをくるむ木の葉である。最近はお金も入れているという。ペニスサック兼，ポケットである。

コテカ（ペニスサック）はヒョータンをくり抜いたもので，形や大きさは実に様々である。常時２，３本のスペアを持っているという。人間が着けた最初の衣である。なかには直径10cm 以上の太いコテカもあり，このコテカの中に貴重品全てを入れて歩いていたという。小物入れ兼用である。イリヤンジャヤの他の部族では貝を利用したコテカもある（図１－２）。

女性はアダン（パンダナス）の繊維で作った腰蓑（SARI）を着けている。既婚者は植物繊維を編んだ腰蓑となる（図１－３）。女性はもっぱら畑での仕事と食事の支度，子供の世話をする。男性は山に出かけ材の切り出し，薪，自然のロープであるロタンの採集をする。時に狩りなど山の幸の採取にあたる。森に火入れ，新しい畑の畝づくりなど，畑での力仕事も男性が行うことになる。

食生活

畑に作付されているのは殆どサツマイモで，これが主食である。その他キャッサバ（低木性の芋類），タロ（里芋），ヤム（山芋），トウモロコシ，サトウキビ，バナナなどが加わる。ニューギニアに一般的なサゴヤシ，ココヤシ等熱帯低地の作物や米もない。この地方のサツマイモは30cm 大もある立派なイモである。肉類は家畜として飼っているニワトリ，野ブタがあるが祭りの時位しか食べれない。盆地内を流れる川（Baliem）には，大型のザリガニ（ロブスター）やナマズなどの魚がいるが，これもごちそうの一つでそうそう手に入らない。

料理はまず先に火で石を焼き，バナナの葉でくるんだイモを土の穴に入れ，その上に焼石を乗せて蒸し焼きにする。ポリネシア一帯に見られる料理法である。

ミネラルの補充

こうした芋類を中心にした毎回の食事では，ミネラル分の不足は避けられない。そこで，この地方で唯一の“塩泉”で彼らは必要塩を得ている（図２－１）。野生動物が利用するヌタ場そのものである。塩泉は村落から遠く離れた山中にあり，この塩を得る為に遠くの集落からも人がやって来る。戦いを繰り返してきた部族も，生きる為に不可欠な塩泉については，特定の部族が独占することなく，自由に利用できるシステムとなっているという。塩の採取は主に女性の仕事になっている。しかし，運搬しにくい塩水を山道をつたって運び降ろすことは難しい。彼らはバナナの茎の髄を乾燥させたものを運び上げ，これをほぐ

して塩水につけ，たっぷり塩水を含ませる。この髄を背負って下界に運び降ろすのである（図２－２）。塩水を含んだ髄は再び乾燥させた後，燃やして塩を含んだ灰を作る。この塩灰はヒョウタンの器に保存され，料理に供されるのである。

ダニ族のルーツ

ダニ族は，オーストラリアの原住民アボリニ人と同じ祖先といわれる。どのようにして，このような熱帯林の中の隔絶した世界に移り住んだのかは，未だに謎のままだ。ただ高地であるということは，熱帯特有のマラリヤから開放されるという利点がある。 彼らにあって最大の貴重品は，この地に存在しない海産品，すなわち貝である。儀礼に使用する物品や権威の象徴としてタカラ貝や二枚貝の一部が使われる。熱帯林の中に隔絶した世界ながら，過去に物の交流手段があったものと思われる。貝の他に，時に中国の陶器すら存在するからである。もちろん貴重品中の貴重品である。

ニューギニア高地に住人がいることが知られたこと自体，20世紀になってからのことであり，飛行機によって偶然発見されたものである。山中の湖に小型水上飛行機で着水し，はじめて文明人との接触となった。そしてニューギニア高地の石器時代人として，世界に衝撃的に紹介されたのである。その後も1960年代まで，この高原では部族間での弓矢による戦争が繰り返されていた。その実戦の模様はＴＶフィルムや写真にも収められている。

その後の探検と調査で，ニューギニア島には，現在海岸域を含めて，インドネシア側のイリヤンジャヤだけで260もの異なる言語を話す部族が存在することが明らかとなった。パプア・ニューギニアでは1000に達する言語があるという。もちろん彼らの持つ文化もそれぞれ異なっている。驚くべき数字である。人間の豊かな多様性を示す数字である。

石器の使用

彼らは現在なお石器を使用している。物を切る，砕く，割る，全ての作業を自然の素材である石，骨，植物材を使っている。いかなる金属文化をも持っていない。しかも石斧，石ナイフなどは，日本の縄文時代の遺跡に見られるものと同様の素材と形をしているのが興味深い。石器は蛇紋岩系統の硬い石を利用する。かなりの遠隔地から入手するという。野ブタや獣，鳥の骨も盛んに利用される。

かざり

最上品は現地に存在しない物，すなわち貝である（まれに陶器）。次に貴重なのは獣の歯で主にネックレスとして利用される。野ブタや獣，カスワリ（ダチョウ型の大型鳥），ときに犬のキバなどが使われる。犬のキバの場合は一匹に２本しかないので，ネックレス一個作る為に30～40頭の犬が必要となる。しかも，現地には犬はいない。コテカに続く，２番目の衣類ともいえるのが頭かざり（帽子）である。リング状の羽根かざりが一般的であるが，植物繊維で編んだネット状の帽子もある。くもの巣を集めた“くもの巣帽子”もあるが，取り外しはできない。いずれのかざりにも鳥の羽根が使われるのはどの部族にも共通するものであるが，イリヤンジャヤ特有のカナリヤや極楽鳥の美しい羽根が珍重されている。

住居

血縁関係で小集落を形成，部族の長の家を中心に複数の婦人の住居と男たちや子供の住む共同住居の長屋とが中庭を作る形で並んでいる。複数の妻には一棟づつ家が与えられ，小ハーレム集団となっている。住宅は一人用住居でハニーハウスと呼ばれるカヤ葺きの小さな円形の建物で，ダニ部族特有の形態である（図３－１，２）。小さな入口一つで窓は全くない。中は高床式となっており，真ん中に小さなイオリがあり，草藁を敷いただけのきわめて簡素なものである。この住宅を作る為には，ちょうど樽を作るが如く定形の板を円形に土に差し込んで立てかけ，ロタンのロープでつなぎ止めていく。このヘラ型の板が，建築材の基本素材となっており，この板の組み合わせで，年長の婦人，男子，子供の住むロングハウスも作られる。ハニーハウス一つ作るにも板が数十枚必要で，男たちはこうした材やロタンを山中から切り出してくるのが重要な仕事となるのである（図４－１）。

農地

ワメナ高地は，バレム川で形成された山中の平原であり，湿地帯が多かったようである。地下水が高い為に，掘割を作り，その土を盛り上げ高うねにする。主食のサツマイモの植えつけはさらに小さな円形のマウンドを作り，２本づつ種イモを入れる。サツマイモの収穫までには９ヵ月間が必要であるが，作付時期を変える事により，常時収穫する事ができる。季節のない地方ならではの方法である。作付はサツマイモ中心に混作形態で，タロ，ヤム，トウモロコシ，キャッサバ，キャベツ，サトウキビ，豆類と多様な作物が作付けされている。

ここでの掘割は灌漑用水でも，排水路でもない。水路や川につながっていないからである。地下水と雨水利用の閉鎖された掘割である（図３－３，４）。

雨の度に流れ去る有機物や土は，この掘割に堆積する。ダニ族はこの泥土をくみ上げることにより，流出した窒素分を畑に再供給してやるのである。肥えた土を流亡させない為の知恵である。ここでは現在尚，肥料や農薬は使用されていない。畑作地ではサツマイモが２回作付され，その後放置され休閑させる。その期間は約５～15年と長い。こうして十分に地味を肥やしてから再び火入れし，掘割を作って農地とするのである。この際の畑作りは，男たちの仕事で，しかも共同作業で進められる。

周辺の山地斜面では，事情が異なる。サツマイモの作付は１回だけで放棄せねばならない。土壌の流出が多く，土地がひどくやせているからである。

９．狩り

狩りには，弓矢の他にワナ（トラップ）などがある。弓は竹製，弦はロタンを使用している。矢はセイコノヨシ（Phragmites karka）を利用，矢の先に竹，骨，矢じりが取り付けられる。矢の先は，鳥用が複数針，獣用が単針の波状となる。

狩りの際には，獣や鳥が寄りつくよう，身体に誘因剤 Atractan を身につける。これには魚や果物，鳥などの様々な臭いがしみ込ませてある。獣は野生のイノシシ，森林生の有袋類クスクス（図３－５）などが狙われる。

テリトリー

彼らの作付中の農地は，頑丈な柵で囲ってある。住宅を作る板とほぼ同じ規格の板を並べ，ロタンのロープで縛って固定している。これは放し飼いにしてある野ブタや野生の獣から農地を守る意味もあるが，何よりもそこが作付中の畑であることを示し，自分の所有地，利用地を示す意味あいの方が強い（図２－４）。

しかも，家屋に較べて，柵は立派に作ってあり，何よりも畑を取り囲む長さは長大で，その労力は莫大なものである。すなわち，多くの野生動物たちが持っている「なわばり＝テリトリー」に他ならないような気がする。テリトリーこそ争いを最小限とする社会法則の原点である。広大な高原ではあるが，一盆地内で多数の部族が生活しているのであり，部族間の戦いも基本的には農地争いが最大の要因だからである。

この柵の板の上には，丁寧にも，山中の森から割り出してきた泥炭（ピート）を乗せ，柵板が長持ちするよう屋根の働きをさせている(図２－５)。草藁の場合もある(図２－４)。

日本の屋敷の例で，立派な門がまえ，土塀がひとつのステータスであるように，ここでは立派な柵がステータスとなっている。

戦い

ほとんど境界のない平原地帯で，農地を争う戦いは避けられない。1960年代までここでは実戦が行われていた。武器は弓と矢，石斧を持ち，戦い用の飾りをつけ平原で渡り合う。各村には平原を見渡す警戒用の櫓が立っている。戦時の防具のひとつにヨロイがあるがロタンやランの繊維を密に編んだものである。しかし，ほとんどの下級兵士は着用していない。矢の先には毒が塗られたり，ラン科植物の繊維を巻きつけてある。当たった矢を抜いても，ランの繊維は体に残り，より強いダメージを与えることになるのである。

以前は首狩りも行われ，村には多数のドクロが残されている（図１－４）。

精霊

死者の霊は，不滅のものであると信じられている。首狩りされたドクロには，中に醗酵した酒を注入，よくシェイクして飲み干したという。この行為により，他人（死者）の技能と知識を吸収できるのである。死者の霊は彼ら独特の手法による木彫りにも象徴されている。すなわち生命をつなぐ“性”　をモチーフにした木像が多いのである。彼らの作品（Asmat Art）はアボリニ人と同様，その高い芸術性は世界的にも有名なものである。彼らのモチーフの中には様々な動物が同時に登場している。その中でワニは強者（ヒーロー）の象徴として，サイチョウは精霊を，チョウは生命の象徴として刻み込まれているのである。

イリヤンジャヤ世界の近代化

アジア最後の未開地イリヤンジャヤも，今急速に変わりつつある。近代技術は今やどんな奥地にも物と人を運んでゆくことができる。イリヤンジャヤ全体で，すでに20もの大小の飛行場があり定期便が飛んでいる。

ニューギニア高地ワメナにも，重機，大型トラック，建築材，電気製品あらゆるものが空輸されてきた。政府関係の各種役所（出張所）も配置され，空港を中心に近代的小都市

が形成されつつある。

町には小さなホテルもあり，トイレは水洗である。水道も電気も，電話もある。役所の事務所では，コンピューターが何台も稼動しており，近代都市の機能を維持している。町のあちこちにはパラボラアンテナが立ち，町の人々はテレビも楽しんでいる。ニューギニア島のインドネシア側，イリヤンジャヤ全体の人口もすでに200万人に達している。イリヤンジャヤの近代化も，まったなしに進行しているのである。

新品種の導入

イリヤンジャヤ高地の原住民ダニ族の伝統的作物は，サツマイモ，ヤムイモ，タロイモ，サトウキビ，タバコなどがあるが，そのほとんどは自生種であり，他地域のものとは異なる種類である。

ここイリヤンジャヤ高地ワメナにも，飛行機によって大量の物と人が導入されてきた。インドネシア政府は，この高地に新たな農業基地建設を目指している。様々な物品とともに新世界作物のトウモロコシ，トウガラシ，キャベツ，ニンジン，カリフラワーなど新しい作物と新品種が持ち込まれている。以前にはまったく存在しなかった稲作も導入されている。当然自生種との競合，病・害虫の発生，新たな雑草の発生など新・旧世界の競合が今進行しているのである。その結果，いかなる生態的な問題が生じるかは時間を経ない限り明らかにはならない。

新文化の導入

物と人の流入は，新しい文化，貨幣，宗教など新しい価値観をも導入してくる。衣・食・住など生活にかかわるすべてのものが大量に，しかも急速にもたらされたのである。

コテカ（ペニスサック）一つであったダニ族は，新しいタバコを得るため，写真を撮る観光客から，一回につき100～500ルピア（現在は500～1000ルピア）を要求しはじめた。守り神としてのミイラを所有する村は，入場料を徴収し，村民は写真を撮るたびにお金を要求する。部族の守護神は，炎天下の陽光下で観光用の被写体として耐えている（図１－５）。野良を歩く一般農民までカメラを向ける度にお金を要求するようになった。それ以外彼等にはお金を入手する手だてはないのである。農民は山から切り出した材や薪，農作物を市場まで担いでくるが，わずかばかりのお金にしかならない。自給自足の農業を続けてきた村落では，生産される農作物はほとんど同じであり，商品価値が低いのは当然である（図２－３）。しかも，交通機関を持たない農民は，長い道のりを歩いて運んでこなければならない。一方，ワメナに運びこまれる品物は全て空輸品であり，インドネシアの一般価格のほぼ倍の高値である。

木材資源

現地産物で最も高く取り引きされるのが木材である。住宅建材用，柵用そして燃料用として木材は欠かせない。

新たに作られたワメナの町では，建築材の空輸にはコストがかかる為，その多くを現地調達に頼っている。山地と森林に囲まれたワメナ地区には，それを支える資源が幸いまだ存在している。

男たちは森に入り，石器を使って木材を切り出す。現場で定形の板状にまで加工し（図４－１），人力で担いで山から下ろしてくる。重労働である。ワメナ高原に面した山の斜面は古くから利用されてきており，ほとんど材木はなくなっている。男たちはより標高の高い地区，そして奥地まで入ってゆかねばならない。樹木を失った山の斜面の草地には，いくすじもの材の搬出路がついていた（図４－２）。

貨幣経済の導入

現金を得る為には，材を含め商品作物が必要となる。しかも自家消費量に加えて，余分に，しかも大量生産を余儀なくされる。これまで幾千年とも知れぬワメナの歴史の中で，周囲の自然と人間の営みのバランスの中に持続してきた関係が，ここにきて一方的に生産性の増大が求められているのである。

農地でも，伝統的な方法での10数年にも及ぶ農地の休閉期などとても取っていられない。生産性をあげる為には，肥料，農薬，新品種の導入が不可欠となってくるであろう。その為により多くの金銭が必要であり，より多くの労働量も要求されるのである。

伝統文化の行方

飛行場を中心としたワメナは，もう他のインドネシアの町とほとんど変わるところはない。電気，水道，電話も入っている。政府関係のすべての省庁の役所も配置された。勿論，町の大多数の人々は通常の衣服を身に着けている。

ある役所の部屋では，制服を着た若い女子事務職員がコンピューターで仕事をしている。その窓の外を，コテカをつけたダニ族の男が通り過ぎるという光景が展開している。こうした事態がいつまで持続できるのだろうか。

インドネシアでの，町の庶民の足はベチャ（自転車タクシー）である。しかし，ジャカルタの中心街は車の増加におされ，ベチャが禁止されてもう久しい。他の大都市でもいつ廃止になるか知れない。古きものは追われて，縮小し，やがて法によって禁止されていくのが常である。ワメナの町には学校も作られた。そうして見るとコテカとサリーが消えてゆくのも以外と早いかも知れない。

移民政策

インドネシア政策は，人口の集中するジャワ島やバリ島から，人口希薄地への移民入植計画（Transimigration）を進めている。そのほこ先は，人口希薄地のカリマンタンやスマトラ，スラベシ，そしてイリヤンジャヤである。このワメナ高地へもバリやジャワ島からの移民が入りはじめている。バリ島からはバリ牛が導入され新たな牧畜も始まっている（図４－３）。逆にワメナの人々が低地のジャヤプラ地区に入植する例も見られる。

イリヤンジャヤ開発の中心都市であるジャヤプラの郊外には巨大な入植地が造成されつつある。熱帯林を切り開いての開発である。

入植農民には約１ ha の農地が与えられている。バナナ，パパイヤをはじめ，キャッサバ，トウモロコシ，トウガラシ，近郊野菜などが栽培され，牛や羊などの家畜とともに多角的に経営されている。しかし，熱帯林を切り開いての開発は，マラリヤをはじめ，多くの病気や農作物の病害虫との闘いを強いられる。

自然環境の劣化

空から見るイリヤンジャヤは，蛇行する河川以外，全く隙間のない熱帯林が延々と続いている。山や谷の地形的な凹凸も判別つかない程である。こうした熱帯林の樹林下も豊かな土壌地帯とは限らない。河川による堆積地やデルタ地帯を除き，むしろ極めて劣悪な土壌で構成されている方が多い。

ピート泥炭と熱帯ポドソル

ワメナ地区の特徴的なものの一つに，農地や集落を囲む木柵である。この木柵の上に尾根代わりにピート（泥炭）が使われている。各集落で使用されている量は莫大なものであり，これらは湿地や山地湿地林から掘り出されてきたものだ。このピート，その主要な素材はシダ類の根茎とコケ類であり，樹林の林下にも20～30cm 程が堆積している。そのピートの下は真っ白い真砂となっている。

ピートの存在自体，枯れ葉や植物体が分解しない強酸性土壌であることを意味している。すなわち，これは強酸性の熱帯ポドソル土壌そのものであり，もっともやせた土壌のひとつである。樹木が切り出された跡地には，白いシャクナゲの花（図２－６）が咲き，ワラビやコシダのシダ植物が大群生していた。これらのツツジ科植物やシダ植物こそ強酸性土壌の指標植物群なのである。

石灰岩の露頭

周辺の丘陵や山岳地は石灰岩が中心である。平原地帯に点在する丘陵はゴツゴツした岩が露出している。土壌の流出した丘陵部はその硬い石灰岩の岩肌を露出させており，真っ白い真砂も見えている。樹木を失った山地の斜面は，雑草こそ生えているものの樹林の回復の兆しも見えない。

樹林の喪失

ワメナ盆地の内，バレム川の流域の河川堆積地（段丘）地帯は，レーム土壌で農業にも適しているものの，周辺の丘陵地や山地は，きわめて貧弱な土壌で占められているといえる。樹木を失った山地斜面は土壌流出を繰り返し，ほとんど森林再生が不可能な土壌条件にまで変質してしまう。土砂崩れ，地滑りなど自然災害の危険性も増大する。

イリヤンジャヤにおける急速な商品経済化は，また急速な森林の減少とパラレルな関係にある。商業的な木材切り出しも海岸に近い地帯から進行している。すでにいくつかの企業体が施業している。

木材の切り出しの跡地は，火入れされ，畑作地へと変えられる。熱帯地方共通の環境破壊のストーリーである。深い樹海の中に森林を焼くいくすじもの煙がたなびいているのを，飛行機の上からも見ることができる。

医療サービス

政府は，商業・農業開発関係の施設の他，社会サービスの導入をはかっている。電気，水道，電話の他，学校の設立も進められている。また医療面のサービスも欠かせない。イリヤンジャヤ低地での最大の問題はマラリヤである。新たにアフリカから侵入したとみら

れるマラリヤ種を含め４種類程確認されているという。

マラリヤのほとんどない高地では，母子の健康保持が重要な役目だという。未だに自然産で，へその緒は竹ベラでカットされている。離乳食も特別のものはなく，乳幼児にも大人と同じサツマイモが与えられているという。

医療チームは今，新しい離乳食の開発を進めている。材料は入手可能な地元生産の農産物である必要がある。今，ここの医療施設ではサツマイモ，キャッサバ，大豆を粉末にし，スープにして与える方法が考案されている。トウモロコシ，ピーナッツ等も試されている。

植物薬の利用

近代的医療の普及には，費用がかかるし，時間も必要である。全ての医療器具と薬品を空輸する必要もある。これでは個々の家庭の健康管理まで，行政主導ですることは，とてもおぼつかない。そこで安くて各家庭で管理しうる健康管理法の導入が不可欠である。

マラリヤに対して民間薬としてバンレイシ科の植物やキャッサバの葉も利用されているが，医療チームではマラリヤの特効薬として中国原産のヨモギ類（Artemisia annua）の栽培を進めている。日本のクソニンジンに良く似た植物で高さ2 m程にもなり，一年生で栽培が安易である。また防虫剤用として，熱帯地方で広く利用されているナンヨウハゼノキ（Azadidratchta indica）の植栽も検討している。こうした薬用植物を各家庭の庭に植栽，利用させようと計画しているのである。

近代化の実験場

大航海時代に始まった大規模な異文化同志の接触は，世界各地の文化に大きな変化をもたらしてきた。あるものは滅び，あるものは相互に吸収しあい変化をなし遂げてきたといえる。特にヨーロッパ文明と南北アメリカ大陸，アジア，オーストラリアでの接触が重要である。

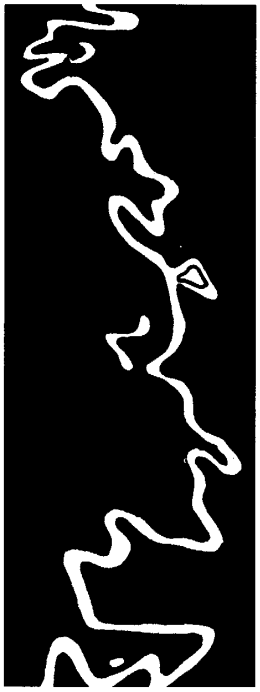
そして，20世紀になって，ここニューギニアの高地で新たな文化の接触が起こったのである。しかも石器時代的文化と近代文化という激烈な接触である。まさに，大きな鳥に乗った，服を着た人間が空から降りて来たのである。それからわずか半世紀で，現住民のあるものはパイロットに，あるいは旅行ガイドに変身するものすら現れているのである。

今，生活，文化，経済全てにおいて，異文化の接触という実験が進行している。それは人間文化だけではなく，作物や家畜の導入などによる異なる生態系の未知との遭遇である。現状は一方的な近代文明の大量導入が行われている。古きものが失われる流れがここでも進んでいるように見える。

今，国連では生物多様性の保持をかかげ，生態系の保全と絶滅の危惧される生物の保全に努力している。健全な人間社会を構築する上でも，人間社会も可能な限り，多様な独自の文化と生活を維持すべきであろう。

イリヤンジャヤ高地のこうした伝統文化は，我々現代人に，人間生活の原点を示してくれる貴重な存在である。イリヤンジャヤだけで260，ニューギニア島では1000を越える異なる言語の存在や多様な部族の住むこの地域は，人類の最大の遺産の一つである。むざむざ失いたくないものである。

2：ダニ族の正装（男子）



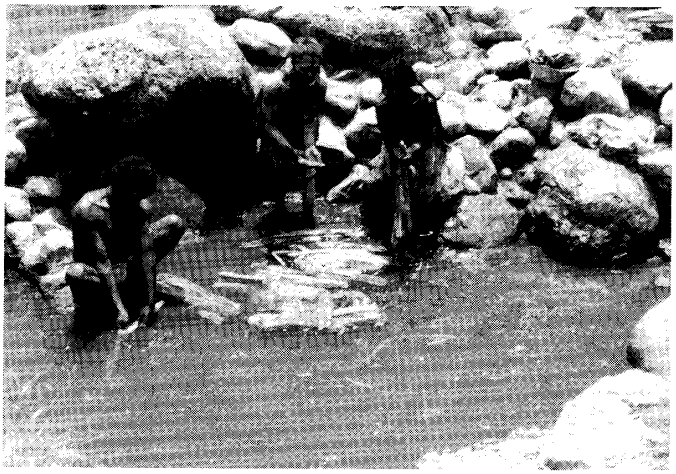
1：熱帯林の中を蛇行する川

3：ダニ族の女性の服装，全身に泥ペイントをしている。

4：大事に保管される勇者のドクロ

5：ダニ族の村に伝わるミイラ

図1．1．熱帯林の中を蛇行する川；2．ダニ族の正装（男子）；3．ダニ族の女性の服装，全身に泥ペイントをしている。；4．大事に保管される勇者のドクロ；5．ダニ族の村に伝わるミイラ



1：ただ一ヶ所の山中の塩泉

4：畑を囲む立派な柵，家畜や獣から作物を守る役目とテリトリーの意味か

2：山中から塩を運ぶのも女性の仕事

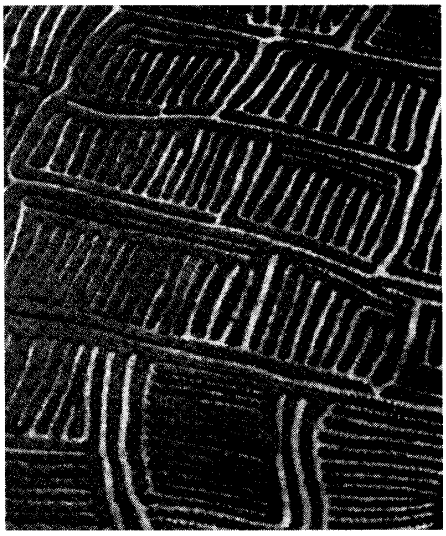
5：柵の上に乗せるためのピート（泥炭）

3：村の小さなマーケット市場，品数は少ない

6：熱帯ポドソル土壌上に咲くシャクナゲの花

図2．1：ただ一ヶ所の山中の塩泉；2：山中から塩を運ぶのも女性の仕事；3：村の小さなマーケット市場，品数は少ない；4：畑を囲む立派な柵，家畜や獣から作物を守る役目とテリトリーの意味か；5：柵の上に乗せるためのピート（泥炭）；6：熱帯ポドソル土壌上に咲くシャクナゲの花

1：ダニ族の集落，家長を中心とした小ハーレム家族，個人用住宅と長屋で構成



4：畑と掘割の配置（空中写真より）

2：複数の妻用の個人住宅ハニーハウス

3：さつまいも畑と掘割

5：市場で売られる野生動物（有袋類のクスクス）

図3．1：ダニ族の集落，家長を中心とした小ハーレム家族，個人用住宅と長屋で構成；2：複数の妻用の個人住宅ハニーハウス；3：さつまいも畑と掘割；4：畑と掘割の配置（空中写真より）；5：市場で売られる野生動物（有袋類のクスクス）

1：山中の森から切り出される木材，現場で基本型に加工される

2：山から木材を搬出するための軌道

3：新たに家畜も導入されている（バリ牛）

図4．1：山中の森から切り出される木材，現場で基本型に加工される；2：山から木材を搬出するための軌道；3：新たに家畜も導入されている（バリ牛）

参考文献

鈴木継美，1991．パプアニューギニアの食生活－塩なし文化の変容－．239pp．中央公論社．
N．ミクルホ＝マクライ（畑中幸子・田村ひろ子訳），1992．438pp．中央公論社．